

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：30105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520275

研究課題名(和文)「ポストヒューマン」をめぐる理論と表象 現代英語圏文学に見る身体加工の表象から

研究課題名(英文) The Theories and the Representations on Posthuman: Reading Body Modification in Contemporary Anglo-American Literary Texts

研究代表者

英 美由紀 (HANABUSA, Miyuki)

藤女子大学・文学部・准教授

研究者番号：40623830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、主として2000年代の英語圏における文学テキストにおける身体加工表象を分析、考察したが、その際、「ポストヒューマン」の議論において、同様の境界形象として取り上げられることも多い「サイボーグ」等の概念にも言及した。そしてこうした身体加工が潜在的にアイデンティティ・カテゴリーを攪乱する力をはらむことには解放の側面を指摘することも可能である反面、身体がいつそう厳しい管理の対象とされつつある現在の社会、経済的文脈にこれらのテキストを位置づけるとき、その解釈は両義的なものとならざるを得ないと結論づけた。

研究成果の概要(英文)：This research project has explored literary representations of body modification in terms of the posthuman, and found that contemporary texts on this topic depict the subversive potential of the practice of challenging fixed, binary categories such as gender and race. On the other hand, this project has posited that these texts acutely sense and depict not only liberatory effects but also the conflicts and difficulties that people simultaneously face from the omnipresence of physical transformation, thus leading to ambivalent conclusions.

研究分野：英文学

キーワード：小説 身体 表象 サイボーグ 怪物(モンスター)

1. 研究開始当初の背景

身体を社会における規範や権力構造を反映する構築物とみなす近年の主張は、ファッションやダイエット等、身体の外見にまつわる現象を個人の欲望としてではなく、社会の枠組において分析する研究の一領域を形成している。一方、身体やそこに施されるさまざまな実践は時に小説や映画等の作品において主題化され、領域横断的な研究の場ともなってきた。本研究課題の研究代表者はこれまで、欧米で1980、90年代以降著しく一般化した「美容外科」に焦点を当て、ジェンダーや人種を主要な分析軸としながら、表象テクストの分析を手がけてきた。

美容外科については、英語圏を中心に複数の理論枠組が提出されているが、1990年代前半来の断続的な議論にもかかわらず、いまだ合意に至らない面を残す。Susan BordoとKathy Davis間の応答に代表されるこの論争の論点は、美容外科手術の施された身体が、性や人種に根ざした権力関係の単なる上書きに帰すのか、或いはそれを掘り崩し、再構築もし得る潜在的な可能性も有するののかという点である。本研究課題の研究代表者はこうした意見の対立をもたらす論点を明確にし、現在主流となっている理論動向を示した。すなわち、男・女、白人・有色人という二項対立的な構図において、その各一方のみが美と関連づけられてきた文化言説を問い直し、美容外科手術がこうした膠着的な構図を上書きするのみならず、同時に揺るがし、再構築する潜在的な可能性も有するというものである。

こうした実績の上に、本研究課題では考察の対象を「身体加工」一般に拡大し、これまでの研究に接続することとした。身体の外見の外科的な操作は、すでに社会における美の規範の再生産の域を超え、時に逸脱的ですがある様々な試みがなされるようになっていく。皮膚表面の装飾から身体の外形の修正まで広範にわたり、「身体加工 (body modification)」とも総称されるこれらの操作は、しばしばその人工性を強調しながら、これまで自明視されてきた有機体・機械、自他といった二項対立とその境界を曖昧化し、またこれらが構造化してきた近代の主体概念を問い直す点で、「ポストヒューマン」の議論に接続可能であると考えられた。

2. 研究の目的

現代の各種医療テクノロジーの発達は我々の身体観に劇的な変化をもたらし、さらには従来の「個」、「自己」の概念をさえ揺るがしつつある。「ポストヒューマン」の議論は、こうした背景において、西欧近代の統一的、自律的主体とそれを構造化してきた二

元論を超える可能性を模索するものといえよう。医学はしばしば文学や映像といった表象領域で主題化され、文化研究の分析対象ともなってきたが、本研究は英語圏を中心とする文化テクストにおける「身体加工」の表象に「ポストヒューマン」の可能性を読み取り、考察することを目的とした。

ジェンダーや人種アイデンティティに根差した個人と社会との関係を考察する前項の美容外科表象の分析・考察に用いた枠組みは依然として有効でありながら、一方では男・女、白人・有色といったカテゴリーそのものの自明性が問われるようになっていく。これらのカテゴリーはそもそも安定的なものでも、相互対立的なものでもない、文化言説に過ぎないことが明らかになりつつある現在、それを措定して展開される議論も限界を免れない。

一方、各種プロテーゼの挿入・装着から、稀には四肢切断や動物に似せた外見の実現にも及ぶ身体加工は、有機体・機械、ヒト・動物といった自然化されたカテゴリーやその境界を侵犯する性質を持つ。ここに対立項を他者化し、同一性の原理に依拠する主体構築のモデルは、不安定化されずにはいない。

こうした問題系はポストヒューマンの議論のそれとも共鳴するものであることから、本研究は現在の理論動向を概観し、それを現代英語圏を中心とする文学、視覚テクストにおける身体加工の表象との関連において分析、考察することを目的とした。

ポストヒューマンをめぐる議論は近年比較的多く提出されてきたものの、その定義、依拠する理論枠組み、捉え方は様々ではない。「人間的」なものへの脅威として慎重論が叫ばれる一方、人間とテクノロジーとの融合を「エンハンスメント」として肯定的に支持する声もある。そこでこの理論、なかでも近代の主体概念を構造化してきた二元論枠組みを批判的に問い直す理論家たちの著作に焦点を当て、精査する必要があると感じた。

3. 研究の方法

本研究の遂行には4年を計画した。初年度はポストヒューマンを論じた文献にあたり、個々の研究の理論的位置を明確にすることとした。続く2年間で身体加工にまつわる医文化史的な背景や社会学における知見も援用しながら、現代英語圏を中心に小説や映画等の表象分析を行い、最終年度は以上の研究を総合し、現代の身体・主体像について体系的な論考を提出することを試みるものとした。具体的には以下の通りである。

(1) 医療テクノロジーの発達を背景に、様々な技術の介入や異物を受け入れる現代人の身体は、ポストヒューマンのそれとも理解される。本研究ではまずこれまでになされ

たポストヒューマンの議論を整理し、翌年度以降の表象分析の基礎とするが、とりわけ近代の主体概念を構造化してきた二元論を批判的に問い直した Donna Haraway や、それに連なる研究者たちの著作に着目することとした。

Haraway が「サイボーグ宣言」を著したのは早くも 1980 年代だったが、そこでは有機体と機械から成るサイボーグの形象を通じ、境界侵犯や混交的（ハイブリッド）主体の可能性が提出された。サイボーグのイメージは現在までには一部「補綴（術）（プロテーゼ）」に取って代われながら、しかしそのイメージが与えるインパクトや、それによって提起される主体のあり方は、その重要性を失ったとも言い切れない。技術的な介入を受けた身体は、その人工性を通じ、有機的総体としての身体、統一的・自律的主体といった諸概念を揺るがすものともとなる。例えば自身も義足を装着する Vivian Sobchack は、こうした装着物がまさしく Haraway のサイボーグが意図したようなやり方で、生物・無生物といった二項対立を混乱させると述べている。

また Judith Halberstam もこうした理論的土台の上に、女性から男性への性別適合手術（いわゆる“F2M”）や日本人主婦の重瞼術を取り上げ、医療の文脈において、ジェンダーや人種といった既存のカテゴリーの虚構性を暴露してきた。後の Ira Livingstone との共編著においても、身体への技術介入は身体の統合性を侵犯するものであり、ここにはもはや純粹、固定的なカテゴリーが存在し得ないことを明らかにしている。

Haraway は一連の著作を通じ、さらに人の発癌性物質を組み込まれたオンコマウスやコンパニオン主としての犬なども「境界生物」の一群に加えた。実際人間概念の再考の契機として、長くその対立項とされてきた「動物」が議論の俎上に載せられるようになっていくことを考えるとき、彼女の議論はその出発点としての意味も持つ。おりしも動物に似せた外見の加工がすでに欧米で試みられ、フィクションにも登場するようになっていく現在、それらの分析に Haraway の研究が寄与する側面もある。

（２）現代の文化テクストにおける身体加工の表象分析に着手するが、その際、身体加工にまつわる医文化史や社会学における研究もあわせて援用することとした。今日身体の外見をめぐるのは、顔面移植の症例が報告されたり、醜形恐怖（BDD: body dysmorphic disorder）やそれにとまなう整形依存症・中毒（cosmetic/plastic junky）が社会問題化されるなど、新たな状況や現象がみられるようになっていく（後者については、Victoria Pitts-Taylor の研究に詳しい）。

これらを題材とした作品も発表されており、本研究はフィクション、さらに映画やコ

ミック作品も加え分析の対象としたが、その中心は 1990 年代以降、とりわけ 2000 年代の作品とした。これらの作品に共通するのは、そこでなされている身体加工がすでに美容外科の範疇を超え、トランスジェンダーや異種間移植を含む反規範的、強迫神経症的なものとなっている点である。またそうして形作られた身体はしばしば「サイボーグ」や「怪物（monster）」のイメージで準えられるが、これらの形象が既存の単一のカテゴリーに帰属しない、混交的な身体、主体を表すものであることは容易に推測された。「怪物」表象については、Rosi Braidotti、Elaine L. Graham らの先行研究があり、後者はシリコン移植や美容外科手術を施した身体がサイボーグであり、怪物的であると述べている。また動物については、Cary Wolf が扱っており、それらに言及しながら考察を進めていくことになった。

4. 研究成果

2012 年発表の論文は、主として 2000 年代のイギリス小説を題材とし、その登場人物たちの反規範的な身体加工表象が、ジェンダーのみならず人間/動物間の境界さえ解体するものであり、またそうした二項対立的な境界自体、文化的虚構にほかならないことを暴いていることを読み取った。またそれを登場人物の主体およびテクストの混交性と重ね合わせて論じたが、その際、「ポストヒューマン」の議論において、同様の境界形象として取り上げられることも多い「サイボーグ」等の概念を援用した。そのうえでここに取り上げた小説が、美容外科手術の主題を通じ、女性美の文化規範を問題化してきた従来の作品群に対し、オルタナティブな議論の枠組を提供するものであると意味づけた。

同様の視点から、2012 年の学会発表では、日本の女性作家による 2010 年代の小説などを取り上げた。近未来を舞台として設定するこれらのテクストに共通するのは、そこで登場人物たちの加工を施された身体がすでに男・女や人間・動物といった既存の単一のカテゴリーに帰属することのない身体、主体を表すものとなっていることである。

こうした身体加工が潜在的にカテゴリーを攪乱する力をはらむことには、解放の側面を指摘することもできよう。しかし身体がいっそう厳しい管理の対象とされつつある現在の社会、経済的状況の延長上にこれらのテクストを位置づけるとき、その解釈は両義的なものとならざるを得ない。また身体加工のこうした側面が自他の境界の不安的化にさえ及ぶとき、人が新たに直面することになるであろう困難が示唆されていることは、着目に値する。そこには自在な変身を可能にする医療技術の発展を一方では享受しながらも、果たして人は希薄化する「自己」をどのように受け止め、折り合っているのかという問

いが提起されているといえる。

本研究を通じ、20世紀後半から、とりわけ21世紀の文学・視覚テキストにおける身体加工表象を検証すると、そこには新たな身体・主体像が提示されていると同時に、英語圏と日本ではこの問題の捉え方において相違が見出されるように思われた。そこで本研究の最終年度である2015年度には、それを各々の文化圏における主体のあり方と関連づける方向で研究を進めた。その際、2013年に書評を手がけた、アジアの表象作品にみられる主体像についての研究は、直接間接に有効であった。

本研究の成果については、博士論文の一部としてお茶の水女子大学に提出したが、今後その出版を通じ、本研究の成果をいっそう明らかにするとともに学術、また広く社会への還元ができればと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

Miyuki Hanabusa, "So Much More than Pretty': Body Modification and Boundary Transgression in Melvin Burgess's Sara's Face." *Jeunesse: Young People, Texts, Cultures*. Volume 4, Issue 2 (2012). 67-85. 査読有

〔学会発表〕(計 2件)

Miyuki Hanabusa. "Possibility of Posthuman Bodies?: Representations of Body Modification in Contemporary Japanese Women's Literary and Visual Texts." The Fourth Biennial International Conference of Contemporary Women's Writing Association. 11-13 July, 2012. National Taiwan University, Taipei.

〔図書〕(計 1件)

〔その他〕

Miyuki Hanabusa. 'Subversive Potential of the Body: Representations of Cosmetic Surgery in Contemporary Anglo-American and Japanese Literary and Visual Texts.' [unpublished dissertation; Ochanomizu University]

Miyuki Hanabusa. "Subjectivity in Asian Children's Literature and Film: Global Theories and Implications. John Stephens (Ed.). New York and London: Routledge, 2013. 232 pages." *International Research in Children's Literature* vol. 6 no. 2 (2013). [book review]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

英 美由紀 (HANABUSA, Miyuki)
藤女子大学・文学部英語文化学科・准教授
研究者番号：40623830

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：